

平塚宿の成立

平塚の地名が史上に現れるのは『吾妻鏡』が最初です。宿の形成は正和 5(1316)年の益性法親王上洛の際の書状に「平塚宿」とあることから、鎌倉時代には存在していたことが窺えます。室町時代には大森伊豆守が平塚城に拠っていますが、太田道灌に攻め落とされます。東海道の宿としては、慶長元(1596)年に石工に与えた伝馬手形にその記載があることから、慶長 6(1601)年に指定されたことは確かとされています。さらに慶安4(1651)年、宿駅窮乏のため八幡村を割いて平塚新宿が加宿されます。平塚宿の高は六百九十二石余、新宿は二百九十二石余でした。



『東海道分間之圖 巻の1』 遠近道印著 絵師 菱川師宣他
1690年 <請求記号: K292/49/1>より平塚

宿の長さは新宿を合わせ約 2km で、南北を御林(幕府が管理する林)が囲み、西側には古花水川があって『東海道五十三次』にも描かれていましたが宝永 6(1709)年に流路が変更されました。宿は江戸方より十八軒町、二十四軒町、東仲町、西仲町、柳町の 5 町で構成されていました。

【参考文献】

『神奈川県史 通史編 2 近世(1)』神奈川県県民部県史編集室 神奈川県 1981年 <請求記号: K21/16-3/2>

『神奈川の東海道 上』神奈川県東海道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年 <請求記号: K68/330/1>

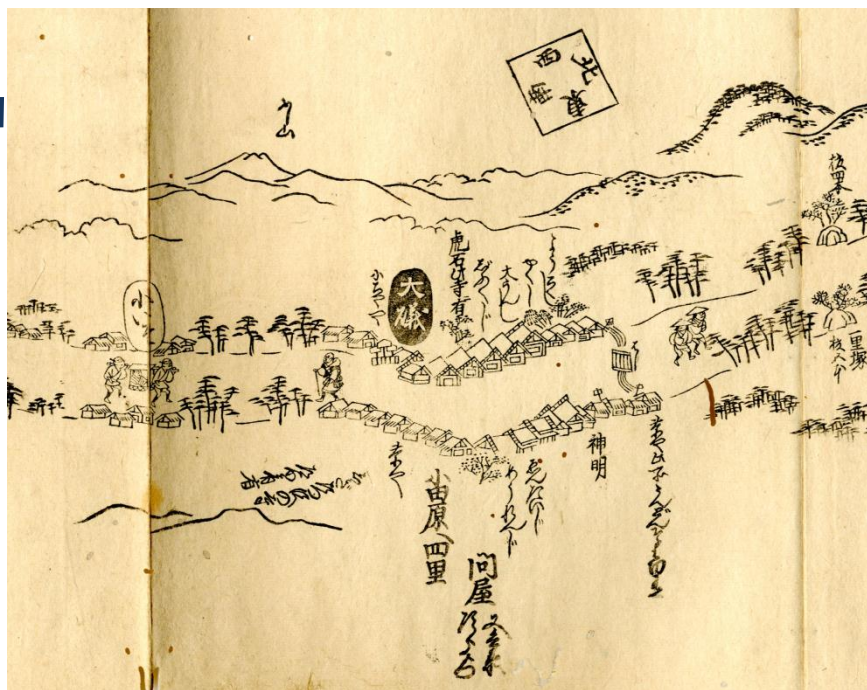
『東海道分間延絵図 第3巻』東京美術 1978年 <請求記号: K292/87/3-1・2>

大磯宿の成立

大磯の名は、『和名抄』に見える「伊蘇郷」に比定されます。また天平 10(738)年の正倉院御物の白布墨書にも、「大磯里」の記載があります。宿の形成は『吾妻鏡』に文治 4(1188)年、平泉の藤原泰衡から朝廷への献上品が「大磯駅」に着いた、との記載があります。また建仁元(1201)年、源頼家が「大磯」に止宿したともあり、鎌倉に近い要所として栄えた様子が窺えます。平塚宿と同じく慶長元(1596)年の伝馬手形に記載があります。また、寛文 6(1666)年の検地帳に「加宿東小磯」とあり、隣の東小磯村が加宿されたことがわかります。

大磯宿と平塚宿の間は約 3km しか離れておらず、県内の宿では最も短い距離です。

石高は四百六十四石、加宿が二百三十七石で、小田原藩領となっていました。また、元は漁師町で漁船 35 艘を持っており、さらに米などを積み出す廻船 4 艘を持つ県下有数の湊でもありました。



『東海道分間之圖 巻の1』 遠近道印著 絵師 菱川師宣他
1690年 <請求記号: K292/49/1> より大磯宿

【参考文献】

『神奈川県史 通史編 2 近世(1)』神奈川県民部県史編集室 神奈川県 1981年 <請求記号: K21/16-3/2>

『神奈川の東海道 上』神奈川県道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年 <請求記号: K68/330/1>

『東海道分間延絵図 第3巻』東京美術 1978年 <請求記号: K292/87/3-1・2>

小田原宿の成立

小田原は、鎌倉幕府が応安 5(1372)年に伊豆山神社に社領として寄進したとされます。応永 24(1417)年の関東管領上杉禅秀の乱の際、山内上杉氏の家臣大森頼頭は鎌倉公方足利持氏に味方して禅秀を平定し、持氏から小田原城を賜います。しかし 6 代目藤頼が幼少であとを継ぐと、伊豆の伊勢新九郎(北条早雲)が明応 4(1495)年に城を奪います。以後小田原は繁栄し東国一の都市と

なりますが、天正 18(1590)年、小田原城は豊臣秀吉に攻略されます。次いで徳川家康の世になると、譜代大名として大久保忠世が城主になり、以後、安部氏、



稲葉氏、再び大久保氏へと移り変わって行きます。『東海道分間之圖 巻の1、巻の2』 遠近道印著 絵師 菱川師宣他 1690年 <請求記号:K292/49/1,2> より小田原宿

江戸からの旅行者は 2 日目に小田原宿に泊まるのが一般的でした。町人町には土産屋、食事屋、衣料屋、雑貨屋、魚屋などが並び、活気に満ちていました。天保 13(1842)年の『竹の花坪帳』によれば、その業種は 16 種類に及びました。

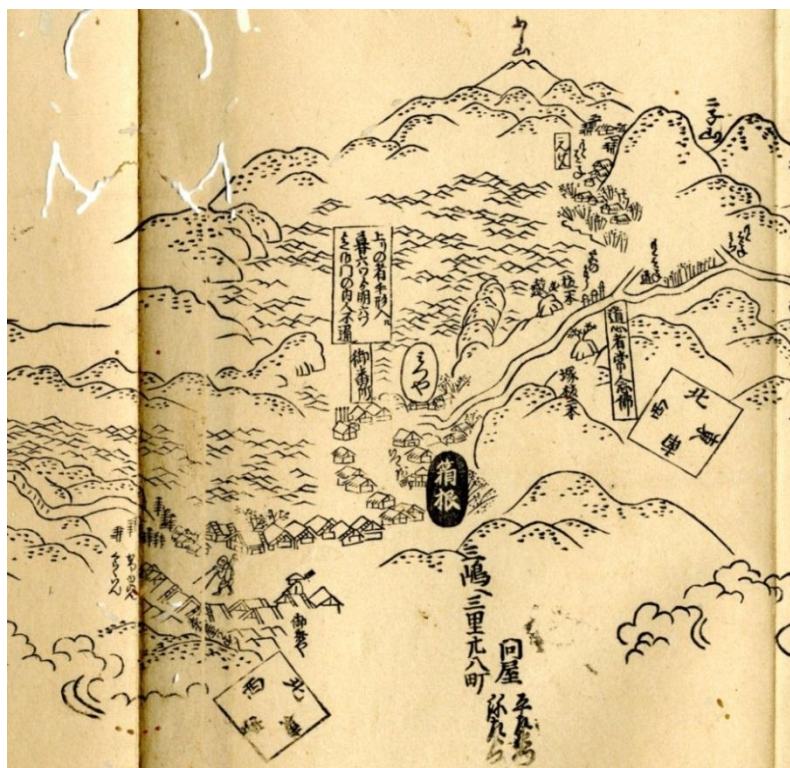
【参考文献】

『神奈川の東海道 上』神奈川東海道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年<請求記号:K68/330/1>
『東海道分間延絵図 第3巻』東京美術 1978年<請求記号:K292/87/3-1・2>

箱根宿の成立

慶長6(1601)年の伝馬朱印状発行時に箱根宿はありませんが、小田原・三島宿間の八里は険阻で、宿の設置が望まれていました。『新編相模国風土記』によると元和4(1618)年に、御掛り奉行松平正綱が箱根宿開設の命を受け、元箱根にある箱根権現の門前の宿の者を移住させようとしたが応じ

ず、小田原と三島から50戸ずつ移して、人家のない原野に宿場を新設したことが窺えます。その結果、五十三次中で唯一、藩領が分かれ今も小田原町、三島町という名が残っています。また不毛の地で無高なため、開設時に幕府



『東海道分間之圖 巻の2』 遠近道印著 絵師 菱川師宣他
1690年 <請求記号: K292/49/2> より箱根宿

は米3千俵を100人に与え、金は入用に依じて給与、としています。さらに助郷村もないので伝馬の設置・継立のみ行って、人足は小田原宿と三島宿が継立をしました。

箱根関所は、慶長年間(1596~1615)には存在したと推測されており、『新編相模国風土記』には、箱根権現の横大門付近から現在地へ移った、と記されています。

【参考文献】

『神奈川県史 通史編2 近世(1)』 神奈川県県民部県史編集室編 神奈川県 1981年 <請求記号: K21/16-3/2>
『神奈川の東海道 上』 神奈川東海道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年 <請求記号: K68/330/1>
『新編相模国風土記 第2集』 間宮士信ほか編 鳥跡蟹行社 1885年 <請求記号: K291/1/2>